ロマン主義の光芒

堤　博　美*

要　旨

ヘルダリーンはロマン主義的詩人だった。しかし彼はいわゆる初期ロマン派の人々とは没交渉に、生涯ひとり孤高孤独な道を歩いた。親しい僅かな友人たちの他は、彼の存在も知らず、その作品もほとんど読まれなかった。不幸な精神の昏迷をきたした後に、彼は再発見され、その作品がまとめて出版される機運が芽生えた。そしてこの悲劇的詩人に正当な歴史的評価がなされるのは、二十世紀に入ってからである。今日では世界的詩人としての彼の地位は不動である。ところでヘルダリーンはしばしば愛の詩人、自然の詩人と称揚される。何故か。それは畢竟するに、彼の作品のそこに愛と自然が副龍するからである。もとより使途自然という二つに概念の背後には、母への愛、女性への愛、大地への愛、自然への愛、ひいては人間（人事万端を含む）と自然（宇宙万象を含む）との複雑な関係が隠顕している。この小論では、ヘルダリーンの作品、書簡集、および彼をめぐる人々の証言を典拠として、才能と気質、運命と予感、ヒュペーリオンとディオティーマ、モラルと文体という四つの視点から、詩人ヘルダリーンの核心に参究したい。

三　ヒュペーリオンとディオティーマ

『ヒュペーリオン』は著者ヘルダリーンの正気の前半生に出版された唯一の小説である。それは一七九四年十一月、シラー編集の文芸雑誌「ターリア」に、最初は断片作品として掲載された。その後、改作、改稿、増補、推敲など幾多の紆余曲折をへて、第一部がシラーの斡旋でコッタ社から出版されたのは、一七九七年の春であった。第二部はそれからさらに二年半遅れて一七九九年の秋に上梓された。この小説の成立史については、シュトゥトガルト大版全集の編集者フリードリヒ・バイスナーが綿密詳細な調査に基づき、その周到な研究経過を全集の第三巻の中で報告している。それをここで簡潔に紹介すると、この小説の構想はそもそも、テュービンゲン大学の学生時代にさかのぼる。すなわち一七九二年夏から翌年の年末のかけて、いわゆる「テュービンゲン草稿」が執筆されたが、その原稿は著者の手で破棄されたのか、全く残っていない。次に一七九四年の春から秋に、「ヴァルタースハウゼン稿」が書かれ、それが断片作品として「ターリア」に発表された。同年の十一月から翌年一月にかけて「韻文稿」が成り、それ

平成11年9月29日受理　*教養部

が年初から夏にかけて「ヒュペーリオンの青春時代」に改稿され、一七九五年の年末までに第三手稿が書かれ、さらに推敲が続いて、一七九六年の十二月か遅くとも翌年の一月までに最終稿が清書され、出版社に送付されて、四月に世に出たのである。第二部の構想はすでに第一部の推敲中に練られ、フランクフルトの銀行家ゴンタルト家での家庭教師時代に執筆に着手したのは確かだが、その詳しい経過は残念ながらあまりはっきりしない。少なくとも一七九七年の九月頃にはかなりの分量の原稿が書かれたことは間違いないが、その後ゴンタルト家の若夫人ズゼッテ（小説の女主人公ディオティーマのモデル）との恋愛、そこから生ずるさまざまな葛藤などがからんで、執筆はなかなか進捗しなかったらしい。その遅延は作者ヘルダリーンも予想しなかったほど長引き、結局第二部の出版にいたるまで二年半を費やすことになったのである。しかし第一部の最終稿の完成から第二部の出版までのおよそ三年の歳月は、詩人ヘルダリーンの生涯において実に比類ない時期であった。創作においても個人的生活においても恐ろしく充実し、かつ緊張した期間だった。まさに天国の幸福と地獄の苦しみの連続であったことだろう。さればこそ作品は美的な実在性に裏付けられた深さを増し、愛の破綻による悲劇が普遍性を帯びるにいたった。その意味で、この小説は詩人ヘルダリーンの青春の総決算であり、それ故にまた詩人の資質を解明するのに不可欠な作品でもある。

ところで、この作品の細部に参究する前に、第一部の冒頭に掲げられた巻頭言にいささか言及しておきたい。

Non coerceri maximo, contineri minimo divinum est.

このラテン語の巻頭言は、ローマ正教イエズス会（ジェズイット教団）の創立者イグナティウス・デ・ロヨラ Ignatius de Loyola（一四九一－一五五六）の墓碑銘からの引用である。それは、ある無名のイエズス会士の手になる九十五行に及ぶ銘文の中の一句であり、正確な原文では、Non coerceri maximo, contineri tamen a minimo divinum est. となっている。言意は「最大のものにも束縛されることなく、またしかし最小のものにも包容される、それは神聖なことである」

ロヨラは日本でもなじみのフランシスコ・デ・サビエル（一五〇六－一五五二）の師であり、サビエルを東洋の布教に派遣した張本人である。軍人出身のロヨラがフランス軍との戦闘で瀕死の重傷を負った後、危篤状態から奇跡的に回復し、療養中に聖母マリアと主キリストの示現する霊眼開化の神秘体験をへて、不撓不屈の「神の戦士」に変貌したのは、ヨーロッパ精神史上に特筆すべき事件である。彼の『自叙伝』や『霊操』は現在も読まれ、影響を与え続けている。そのロヨラの墓碑銘の一句を、ヘルダリーンがその小説の巻頭言としたのは、いかなる故であろうか。少なくともヘルダリーンがロヨラの著作を読んだという確証は、今までの所見当たらない。では彼はどこでこの金言を知ったのか。どうもテュービンゲン大学在学中に聴講した講義で、誰か教

授がかの墓碑銘に言及した際に、ヘルダリーンがそれを記憶に留めたか、もしくはノートにメモしたか、いずれかに因るらしい。その由来はともかくとして、この文句にヘルダリーンが共鳴し、それを処女作の冒頭に標語として記載したのは事実である。ここに若きヘルダリーンの不屈の心意気、その独立不羈の精神がほのかに察知されるのではなかろうか。余談ながら筆者はこれに関連して、ブレーズ・パスカルの『パンセ』の中の言葉を連想し、精神の類似性というものを感知した。イエズス会の「神の騎士」ロヨラと敵対するヤンセニズムの理論武装家パスカル、それらとロマン主義的詩人ヘルダリーンに一体どのような関係があるのか。これもなかなか興味のある問題だが、残念ながら目下の筆者にはその考察をする時間的余裕がないので、また別の機会に譲ることにする。

さて巻頭言につづく序文の中にも注目する文言がある。

Die Auflösung der Dissonanzen in einem gewissen Charakter

この句もなかなか意味深長であって、不用意に読み流してはいけないものを含んでいるように思う。何故ならば、この句は作者がこの小説を書く理由、動機、目的を凝縮して表現したもののように見受けられるからである。この文言の後半の in einem gewissen Charakter（ある性格の人物）とはもとより、この小説の主人公ヒュペーリオンのことではあるまいか。されば主人公は当然のことながら、作者自身の投影部分が多いから、ある性格の人物とは、すなわち作者自身の間接的表明と解して差し支えないだろう。ギリシアの当代の青年ヒュペーリオンに仮託して、フランス革命の激流に飲み込まれそうなドイツの一青年の内面を叙情的に表現する、それがこの小説の主旨であろう。内面に様々な矛盾、葛藤、軋轢、すなわち心的不協和音を絶えず意識し、その解消と一にして全なる自然への回帰を希求する青年ヒュペーリオンの悲劇的運命、それがこの小説のテーマであろう。だから序文の簡潔にして些か抽象的な文言にも、この小説にこめる作者の熱い気持ち、真摯な意図が込められていると思う。単なる思想の素材としてでなく、かつまた単なる娯楽的な読み物としてでなく、主人公ヒュペーリオンの内面に直接参画して、そこから世界を見直してほしいとする作者の要請、それに筆者はできるだけ忠実に従いたいと思う。

この小説はギリシアの青年ヒュペーリオンがドイツの友人ベラルミン宛に書いた書簡集という形態をなしている。この小説形式と同時代の文学作品との位置関係については次の第四章で触れるので、ここでは言及しない。ただこの小説に登場する人物達の名前について若干説明が必要かと思う。主人公ヒュペーリオンの名称はギリシア神話の太陽神ヘリオスの別名で、ホメーロスでは不死身の巨人ヒュペーリオンと呼ばれる。この命名は小説の最初の構想から決まっていた。彼の恋人ディオティーマはプラトンの『饗宴』の中でソクラテスが愛の問答

を交わす女性の名前に由来する。年長の友人アダマスはホメーロスの『イーリアス』に登場するトロヤ人男性の名前、刎頸の友人アラバンダは小アジアの都市の名前、年輩の友人にして助言者ノターラは、詩人がこの小説の舞台としてギリシアと小アジアの風土を描写する際に利用したイギリスの旅行家チャンドラーの『ギリシア、小アジア紀行』の中に出てくる親切な当代コリント男性の名前。ちなみに小説には登場しないが、主人公が書簡の宛名として呼びかける相手ベラルミンは中世ドイツの実在の大司教ロベルト・ベラルミン Robert Bellarmin（一五四二―一六二一）に因るもので、かつての神学生ヘルダリーンには熟知の名前だった。またその他小説の舞台となる土地や島や城塞や遺跡や神殿、野や山や川や海や入江の名前はすべて実在のもので、それらは前記の紀行記から借用したのであろう。

それではこの小説の内容を具体的に見て行こう。そして主人公の独白から何が聞こえてくるかつぶさに観察しよう。その響きは最初からもの悲しい音色を奏でる。

僕の愛する人々は遠く離れいたり、死んでしまった。その人達の声はどこからも聞こえてこない。この世の僕の仕事は終わった。意欲満々で仕事に向かったが、結果はその為に血みどろになった。……名もなく、寂しく帰国し、墓地のようにあちこちに点在する祖国の地を独りさまよう。僕を待ち受けているのは恐らく、僕らギリシア人を森の野獣のように狩って喜ぶ狩人の刃であろう。

失意の内に外国から帰国したヒュペーリオンの悲痛の声が言々肺腑をうつ。しかし美しい祖国の自然はまだ彼の孤独と悲しみを慰めてくれる。かつて希望と理想に燃えていたヒュペーリオン。彼の感じる理想とは何か。桃源郷とはいかなる状況なのか。生きとし生けるものと一つになり、森羅万象と融合すること、自己を忘却して自然の万象の中に帰りゆくこと、永遠に一なる世界に同和すること、それこそが人間の至り得る最高の喜びであり、至福である。万物の結合によって死は消滅し、不滅の青春と不朽の生命が世界に充満する。だがこの理想が実現せず、桃源郷が幻として消え去るのは何故か。それは人間精神の不自然な分裂に起因する。人為的な教育による強制に根差す。思考は意識を無意味に拡大し、分別は価値を矢鱈に多様化する。それが一にして全なる調和を破壊する。ヒュペーリオンの次なる慨嘆は決して時代錯誤のものではあるまい。

ああ、僕は君達の学校などに行かなければよかった。僕は学問の深い孔穴にまで入り込んで、若さと愚かさのゆえに、自分の純粋な喜びがそこにあるかと期待していたが、あにはからんや、それが僕の有する一切を台なしにしてしまった。僕は君達のところで余りに理性的になった。自己と自己を取り巻くものとを区別することを徹底的に学んだ。その揚げ句の果てに、僕は今美しい世界の中で孤立している。自分が育ち開花した自然の庭園から放逐され、真昼の太陽に晒されて枯れようとしている。ああ、人間は夢見る時は神

であり、思考する時は乞食である。感動感激がなくなれば、人は父親の家から追い出された不肖息子同然だ。お情けに路上に投げ与えられた小銭を見つめる他はない。

かくしてヒュペーリオンは自己の過去を振り返り、その行路を物語る。あどけない幼時の日々。その無邪気な安らかさ。天使のような汚れなさ。分裂も不和も知らない平和と自由。自分の意欲を外に向かって示す他は何も知らない。幼時期こそまさに天国である。だがやがて周囲の人間が彼を甘言で楽園から誘い出し、呪いと戦いの野に放逐する。幼児は学習と強制によって否応無く大人への道を歩き始めねばならない。少年の時期はまだよい。憧れと期待に胸を膨らませて、美しい未来の到来を夢見ることもできる。花咲き乱れる野辺に坐って、やさしい春の光を浴び、晴れやかな青空を流れる白い雲を見つめながら、天地自然と生をあるもの全てを創造された神の偏在を信じた日々。だがそれも瞬く間に過ぎ去った。少年時代から青年に移る時期に、ヒュペーリオンはあたかも一つの鬼火のようにあちこちをさまよい、あらゆるものに手を出し、ありとあらゆるものに心を奪われた。しかしそれもほんの一時の間で、当てのない努力に心身は困憊するばかり。どこへ行っても、何をしても充足感は得られなかった。そして真の目標がどこにあるのか、疑惑と焦慮に駆られる日々。そうした時期にヒュペーリオンはアダマスに出会った。

アダマスはギリシア人ではないが、愛と英知、平静さと力を兼備する戦う人である。古代の偉大な人間を現代に再生すべく、その素材と技術を捜し求めて諸国を遍歴し、ギリシアにやって来た。彼はヒュペーリオンの素質を見抜き、大人物に育てるべく、プルタークの英雄世界へ、あるいは古代の神話世界へ案内した。またある時は数字と尺度によってヒュペーリオンの青春の衝動を制御し緩和してくれた。時には一緒に山々に登り、昼は野や森の色々な草花や岸壁の苔を眺め、夜は空の清らかに輝く星辰を仰いで、人間的な流儀でそれらを理解しようと努めた。それからまた二人はともにギリシアのあちこちの山河を跋渉し、神殿や廃墟を巡覧して、偉大な自然の営みと歴史の栄光の深みへも参入した。しかしそうした感激と喜びの黄金の日々もまた過ぎ去る時が来る。アダマスとの別離。アジアの奥深くに今も稀にみる傑出した民族が隠れ住んでいる、そういう噂を耳にしたアダマスはそれを捜し求めにアジアに旅立つ。「太陽神の如くあれ」と激励してくれたアダマスが、別離に際して、ヒュペーリオンの運命を予見する。

君は孤独になるだろう。仲間たちが遥か遠くの国に春をもとめて旅立つのに、厳しい季節の中にただ一羽取り残された鶴のように、君は孤独な身になるだろう。

アダマスが去ってから、ヒュペーリオンも郷里の島を離れ、小アジアの町スミルナに修業に出る。それは父の助言に従い、航海と戦争の技術を学び、諸民族の言語、その制度、思想、風俗、習慣を学び、あ

らゆることを吟味し、その中から最善のものを摂取する為である。忍耐することも学ぶように、とは母の願いだった。かくしてヒュペーリオンはホメーロスが誕生し活躍したという伝説の土地に住み、新たな修業の生活を始めた。周辺の自然は確かに素晴らしかった。だがその土地の住民たちは癒し難い世紀の病気に侵され、その精神は卑小で、腐敗堕落していた。そんな連中との交際や社交はヒュペーリオンに嫌悪と侮辱を感じさせるだけだった。そのような暗鬱の日々、ゆくりなく若き偉丈夫が現れた。それが肝胆相照らす刎頸の友アラバンダであった。ここにヒュペーリオンの無意味な生活は終わりを告げる。

二人の若者の魂は、それまで不本意にも閉ざされてきただけに、それだけ一層強く引き合うことになった。彼らの出会いは、宛ら二つの小川が山から流れ下り、土塊や石や朽木、流れをせき止めるあらゆる障害物を払いのけて、互いに河道を切り開きながら近づき、やがて同じ力で相互に捕らえ、一つの壮大な大河となって大海へそそぐ旅を始めたのだ。アラバンダはその運命故にか、あるいは粗野な人々の仕業故か、少壮から家を離れて異郷をさすらい、惨めな生活の中で粗暴にそだったが、しかし内面は愛情に充ちていて、粗い殻を突き破って本来の自己に立ち返りたいという願いを抱いていた。一方ヒュペーリオンは早くから他とは決別し、人々の中では魂において異邦人で孤独だった。世間の常識から嘲笑されながらも、自身の心の中の矜持は守っていた。そして未来への希望とより美しい生活への期待に胸を膨らましていた。こうした二人が出会い、たちまち意気投合するのは自然の成り行きだった。それからというもの、二人は常に行動をともにして、語り合い、論じ合い、互いの心情を吐露し合った。異民族の支配に甘んじて過去の栄光を忘れ、品位を失って堕落した現在のギリシアに対する悲憤に、二人の青春の血は沸騰する。

我々は何をなすべきか。英雄は名声を失い、賢者は弟子を失った。偉大な行為も、高貴な民がそれを見て聞くのでなければ、鈍い額に与える一撃以上のものではない。気高い言葉も、気高い人々の心に反響するのでなければ、泥土に落ち込む枯葉にすぎない……僕はシャベルを取って、その泥土を堀の中に投げ捨てよう。精神と偉大さに触れても、精神と偉大さを生まないような民族は、今なお人間であり続けている他の民族と何の共通点もないし、もはや何の権利も持たない。こういう意欲もない屍どもを、ローマ人のような心情を秘めているかのように尊敬するのは、空しい茶番であり、空しい迷信だ。そんな民族は滅びるがよい。朽木はそのまま立っていてはならない。それは、これから育って新しい世界をつくるべき若い生命から、光と空気を盗み取るだけだ。

ヒュペーリオンのこうした憤激に対して、アラバンダも熱烈に反応する。

まさにそれこそ僕の持論だ。それでいい。君は素晴らしい言葉を吐露した、ヒュペーリオンよ。何と、神が虫けらによって左右されてたまるものか。我々

の内部に宿る神、無窮を軌道として進んでゆく神が、虫けらが脇に避けるまで待っていてよいものか。いや、そんなことは決してない。彼らの意欲が何であるかを問う必要はない。この奴隷にして野蛮なものども、彼らは意欲など持たない。彼らを改善しようなどと考えても無駄だ。ただ彼らに人類の勝利の歩みの邪魔をさせないことだ。ああ、誰か松明に火をつけてくれ。無気力な愚人どもを殲滅してやる。

このように共鳴共感した二人の共通の願いは、自分達だけの私的な幸福にあるのではない。異民族の圧制に苦しんでいる祖国を救い、その祖国に過去の栄光にふさわしい自由を取り戻すことにある。その意志を貫徹するか、さもなければ自ら破滅するか、そのいずれかだ。それが彼らの青春の熱情であり、彼らの友情の基盤なのだ。だが、その熱情も彼ら二人だけでは、ただの線香花火でしかなく、とても敵を殲滅する焼夷弾とはなりえない。一人の人間がいかにその膂力を発揮したとしても、衆寡敵せずの譬えもある。星辰の運行を誰も変えられないように、流転して行く世の動きを制止できない場合もある。浮沈消長するのが世の習いとはいえ、わずか二人の人間が切歯扼腕したところで、腐敗堕落した祖国を救済できる見込みはない。彼らは自分達の無力を痛感する。それでも彼らは叫ばずにはいられない、闇に包まれた牢獄に坐して、徒に青春の歳月を浪費してよいのかと。いや、いつか来る、きっと来る、この牢獄が打ち破られて、祖国の解放される日が。その時に、天から注がれる慈雨が地上に春をもたらし、真の精神を持つ人がその崇高さを発揮する新しい時代が。そうした希望なくして、何の青春ぞや。そもそも希望のない人生に何の意義があろう。今は多勢に無勢でも、いつか希望の実現する日が来る、それを信ずるのだ。

ところでかくも意気投合した二人にも、その気宇に著しい相違がある。アラバンダが豪気大胆であるのに対して、ヒュペーリオンは多感にして繊細すぎる憾みがある。それが二人の衝突の因となる。例えば、感激屋のヒュペーリオンが有頂天になって話していると、皮肉屋のアラバンダの表情に一抹の嘲笑が浮かぶ。それを察知するや、ヒュペーリオンの感じ易い傷つき易い心情が怒りで爆発する。友情が決裂せんとした瞬間に、二人のいる部屋に、突如見知らぬ男たちが数人闖入する。それは、アラバンダのかつての仲間、ネメーシス(復讐の女神)の結社の幹部たちで、革命をひそかに企てている連中である。彼らは自分達の計画の遂行のために、アラバンダを探しにきたのである。彼らはヒュペーリオンに対しても彼らの意図を打ち明け、同志になることを期待する。中の一人が言う。

我々は君に答えよう。我々の目的はこの地上を掃き浄めることにある。耕地から瓦礫を拾い、固い土くれを鍬で砕く。鋤で畝の溝をすく。雑草を根っこから引き抜き、その根を切り取る。そして太陽の熱でそれを枯らすのだ。

別の男が彼らの過去を振り返る。

我々は人生の黄昏に近い。我々はしばしばさまよった。望みは大きかったが、なし得たことは少ない。思案するよりも、むしろ断行した。仕上げを望んで、僥倖をあてにした。歓喜と苦痛について多く語り、そのどちらも愛し、かつ憎んだ。我々は運命をもてあそび、逆に運命にもてあそばれた。乞食の身分から王位まで、運命は我々を翻弄した。

長老とおぼしき男が強気の態度で付言する。

我々がかく言うのは、自分達のためではない。それは君達のためなのだ。我々は人の心をくれとおねだりなどしない。我々には人の心も意志も不要だ。なぜなら意志は決して我々に逆らうことはないし、人心はすべて我々の味方だからだ。愚者も賢者も、凡人も賢人も、粗野な長所や教養の美点を持つ者が皆、雇われもしないのに我々に奉仕し、盲目的に我々の目的のために協力する。ただ望むらくは、我々の成果を享受する者がいてほしい。だから千人の盲の協力者の中から最善の者たちをより抜いて、それらを目明きの協力者にしようと思う。しかし我々が建設した場所に誰も住もうと思わなくても、それは我々の責任でもないし、また損失でもない。我々は我々の本分を果たしたのだ。我々の耕した所で誰も収穫をしないからと言って、誰が我々の咎とするだろうか。林檎の実が沼に落ちたからと言って、誰が林檎の木を咎めるだろうか。私はよく自分に言い聞かせたものだ、お前は腐敗の犠牲者なのだと。それでも私は自分の仕事を果たしたのだ。

結社の連中の詭弁に憤激したヒュペーリオンは、即刻アラバンダの部屋を飛び出す。アラバンダの嘲笑、奇怪な一味との結託、それがヒュペーリオンの瞋恚を増幅した。翌日訪ねてきたアラバンダを激しく難詰し、本心は和解し抱擁し合いたかったのに、結果は喧嘩別れをしてしまう。友情を失ったヒュペーリオンは、スミルナでの修業を打ち切り、郷里の島に帰った。傷心の悲哀、憂愁の時の幕開け。青春の意欲は消え去り、人生の暗闇に死の沈黙が忍びよる。

満目荒涼たる世界に冬眠していた魂にも、やがてまた春が到来して、青春の息吹、喜びと希望が蘇る。ギリシアの春。大地は次第に緑を増し、野面は広々として生気に包まれる。矢車草が点々と笑み笑い、黄金色の小麦が延々と波打つ。新緑の深い森陰からそびえ立つ明るく晴れやかな峰々。優しくおおらかな遠い山並み。山々は畳々として重なり合い、太陽の高みに連なる。大空は清らかに澄み渡り、白光は天空に憩い、微かな有り明けの月が一片の銀色の雲のように中天に浮かんでいる。

折しも、カラウレア島に住む知人に招かれ、ヒュペーリオンは美しい自然に恵まれた平和な島に渡った。しかるに、思いきや、そこで憧れの美の化身ディオティーマに邂逅するとは。彼女は思慮深く思いやりのある母親と率直で快活な弟とつましく暮らしていた。涼しげに開いた青い眼、優しく花咲くような唇、天使のように愛らしい顔、威厳と優美さに充ちた姿、それらは気高く神聖な彼女の精神とも調和して

いた。最も美しいもの、最も聖なるもの、それがディオティーマ、その人だった。彼女は花を慈しみ、花の名前にも暁通していた。ただに山川草木に親しむばかりでなく、さらに人の心を和ませる料理の心得もあった。彼女は他に要求するものが少なく、自らに安んじることが多かった。この世のあらゆる憧れ、あらゆる夢をその静かな魂の中に体現している安らかさ、その安らぎの美しさ。そのディオティーマにヒュペーリオンは、自分の過去、アダマスのこと、スミルナにおける孤独な日々、アラバンダとの出会いと決別、その後の自らの心の病などを物語った。それを聞いた美の女神は瞬時に若者の魂を洞察する。

あなたは人間を求めていたのではありません。一つの世界を求めていたのです。幸福な瞬間に凝縮されて感じ取られた幾世紀に亙る黄金時代のすべてが失われたこと、より良い時代の最も優れた精神、英雄たちのもてる最高の力、そうしたものをただ個人が、一人の人間が代替してくれるように、あなたは望んだのです。これでお分かりでしょう、あなたがどれほど貧しく、どれほど豊かであるか、何故そんなにも誇り高く、またそんなに意気消沈するのか、何故喜びと悲しみがそんなに激しく入れ替わるのか。あなたが一切を所有しながら、同時に無一物だからです。到来すべき黄金時代の幻想を抱きながら、それが現実とならないからです。あなたが正義と美の領域の市民であり、日中に忍び寄る美しい夢の中に出現する神々の一人でありながら、眼が覚めると現在のギリシアの大地に立っているからです。

かくして美の乙女と青年の魂は感応し合い、一つの美しい花と化する。かくも神々しく純粋無垢な愛が実在しようとは、当人達ですら予想しなかった。魂の中に咲く清らかな白百合の花、それは大切に慈しみ育まねばならない。ここに古い世界が死んで、新しい世界が始まった。生命と精神とが愛の中で融合して、平和な桃源郷が出現した。

ある晴れやかな春の日に、数人の友人達と一緒にヒュペーリオンとディオティーマはアテネへ旅をした。その船路の途中で、一行は古代アテネ人の卓越性とその由来について語り合う。友人達の中のある者は、それを風土に帰し、別の者は芸術と哲学に帰し、第三の者は宗教と政体の所産と主張した。ところがヒュペーリオンはそれらの意見を本末転倒と否定し、古代アテネ人の所有した「中庸の徳」がその卓越性の母であるとみなし、さらにその自説を開陳する。

人間的で神的な美、その最初の子供が芸術です。芸術において神的な人間は自己を若返らせ、自己を更新する。人間は自己自身を感じたいのです。だから自己の美と対峙する。そのように人間は自己に自分の神々をもたらしたのです。というのも原初、人間と神々とは一体だったし、永遠の美自体、自己を意識していなかったのです。……神的な美の最初の子供が芸術です。少なくともアテネ人達の場合はそうでした。美の次女が宗教です。宗教とは美への愛なのです。賢者は美そのものを愛するのです。美は無限にして一切を包括する存在です。民衆は美の子供達を、すなわち様々な形で顕現する神々を愛するのです。アテネ人達の場合もそうでした。そうした美への愛がなく、

そうした宗教がなければ、あらゆる国家は生命も精神もない、ただのひからびた骸骨にすぎない。それにあらゆる思考や行為は樹冠のない樹木、柱頭を打ち落とされた円柱にすぎない。……彼らの芸術と宗教は永遠の美の、すなわち完成された人間性の申し子であり、ただ完成された人間性からのみ生まれえたのです。このことは彼らの崇高な芸術が生み出した作品とその宗教を偏見のない眼で見ようとしさえすれば、明白なことです。ギリシア人も芸術作品をそうした捕らわれのない眼で見て、それを愛し、尊敬したのです。

優れた芸術と宗教を生み出したギリシア人が、また同時に卓越した哲学をも生みえたのは何故か。それは彼らが詩的な民族だったからだと、ヒュペーリオンは言う。

詩は哲学の初めであり、終わりである。ミネルバがジュピターの頭から生まれたように、哲学は無限にして神的な存在である詩から発生したのです。ですから詩の神秘の源泉で両立しえないものが、最後にまた詩において合流するのです。

ヘラクレイトスの偉大な言葉《多様性の一者》、これはギリシア人にしか思い至らなかった概念です。何故ならば、それこそ美の本質だからです。それが発見される以前には、いかなる哲学もなかったのです。全にして一なるものが存在した、と定義できた。花が開いた、そこで分解が可能になった。美の瞬間が人間たちに告知された、それが生命と精神の中にあって、無限にして一なるものが存在した。それを精神の中でばらばらに分解して、その分解されたものを新たに統合して考え、最高にして最善なるものの本質を次第に認識し、それから認識されたものを精神の多様な領域で法則として打ち立てることができるようになったのです。何故とりわけアテネ人がまた哲学的な民族たりえたかが、これでお分かりでしょう。

到着の翌日、一行はアテネの中心部を見物した。アクロポリスの丘のパルテノン神殿を初め、古代バッカス劇場の跡、テーゼウス廟、オリュンピオン遺跡の円柱、古代のハドリアン市門、それらはすべて古代アテネの栄光の名残だったが、その無残な浪費がヒュペーリオンの精神を圧倒し、疲労させた。それを気遣ったディオティーマは友人達から離れて、彼を緑の野辺に誘った。オリーブの樹と糸杉が涼しい木陰をつくり、レモンの樹の黄金の実が葉陰に輝き、実りゆく葡萄の蔓が垣根越しに伸び、熟れた柑子の実が路傍に落ちている辺りを逍遥した後、広々とした野原に坐って、静かな幸福感に浸りながら、二人は語り合う。美の乙女がヒュペーリオンの使命を示唆する。

イタリアへおいでなさい。そしてドイツへ、フランスへ。何年ぐらい必要でしょうか。三年か四年、そう三年で充分かと思います。あなたは決して進歩の遅い方ではありませんから。そこで最も偉大なもの、最も美しいものだけを求めるのです。あなたは私達民衆の教育者になられるのです。あなたが偉大な人物になられるのが、私の願いです。もしあなたがそのようになられ

た時に、あなたを抱擁できましたら、私がその素晴らしい殿方の一部であるかのように思うでしょう。そして神話の中のあの双子の兄弟のように、あなたが私に不死身の生命の半分を分かち与えて下さったように、大喜びすることでしょう。ああ、ヒュペーリオン、そうなれば、私は誇り高い乙女となることでしょう。

かくして自己の大いなる使命に目覚めたギリシアの青年ヒュペーリオンは、名状しがたい歓喜に包まれ、祖国と愛する乙女の為に、新たな人生の目標に向けて出発の決意をする。ここで、この小説の第一部が終了する。

第二部の冒頭にも巻頭言が掲げられている。それはギリシア語である。

μη φυναι,τον απαντα νικα λογον.το δ'επει φανη βηναι κειθεν,οθεν περ ηκει,πολυ δευτερον ὡς ταχιστα.

この標語はソフォクレスの悲劇『コロノスのオイディプス』の第千二百二十四行から二十七行までの引用である。言意は「生まれてこないのが最善である。次善は一旦生まれたら、その生まれ出た所へ、できるだけ速やかにもどることだ」。誰もが知っているギリシアのオイディプス王の伝説。その残酷悲惨な運命を考えれば、この言葉の背景も自ずから得心がいくだろう。ギリシア古典の造詣が深かったヘルダリーンが、ヒュペーリオンの第二部の冒頭にこの詩句を引用した真意は那辺にあるのか。この小説の執筆中に既に次作『エンペドクレスの死』を構想していた詩人には、この詩句は心から共鳴するものがあったに相違ない。さればこそ主人公の運命を示唆するのに剴切と判断したのではなかろうか。

さて忘れ難い春のアテネ旅行からはや数カ月が過ぎて、季節は秋となった。甘い愛の悩みと過ぎ去りし歓喜の思い出を祝う祭りの季節だった。それはまた、すべてが移ろい褪せて行く無常を感じる感傷的な季節でもある。鮮やかな緑の野もいつしか灰色に色褪せて、木々は黄葉して枯葉を散らし、渡り鳥たちも南の国へと旅立つ。平和な幸福な時もまたいつか過ぎ去る。行く秋の日が次第に短くなり、憂いと悲しみが長い影を落とし始める。そして滅びへの予感が人の心に音もなく忍び寄る。折しも風雲急を告げる事態が生じた。ある日、ヒュペーリオンのもとへ久しく音信の途絶えていたアラバンダから一通の手紙が届いたのである。そこにはこう書かれていた。

事態が急転している。ロシアがトルコに宣戦布告した。ロシアの艦隊が多島海に来ている。トルコの君主をユーフラテス河まで追い払うのに、ともに蜂起して協力すれば、ギリシア人に自由を与えるそうだ。ギリシア人はその役目を果たすだろう。そして自由になるだろう。僕は本当に嬉しい、ついにまたなすべきことができたのだから。事態がここにいたるまでは、お天道様

を拝むのが申し訳なかった。君が昔通りの君なら、来たまえ。ミシストラ街道を来れば、コロン要塞の手前の村に僕はいる。僕は丘の中腹の森に面した白い田舎家に住んでいる。スミルナの僕の家で君が遭った連中とは、僕はおさらばした。君があの連中の仲間に入らなかったのは正解で、君の勘が鋭かったのだ。我々二人が新たな生活の中で再会するのを、僕は切望している。君にとっては、これまで世間があまりにくだらなさすぎて、君の真価を知らしめることができなかった。下僕の仕事をするのが嫌で、君はこれまで何もしなかったのだ。その無為が逆にまた、君を気難し屋の夢想家にしたのだ。君は沼で泳ぎたくなかったのだ。さあ、来たまえ。一緒に広い海で泳ごうではないか。人生意気に感じようではないか、無二の友よ。

この手紙はヒュペーリオンにとって、まさに晴天の霹靂だった。ディオティーマとの幸福で平穏な生活に慣れ、無為の日々の中で不精になりきった彼は、自分の不甲斐なさを恥じ、自分の怠惰を責めた。アラバンダは常に自己の力を発揮すべく、あらゆる好機を虎視眈々とねらっていたのだ。それに引き換え、お前は何をしているのか。こんなふうに拱手傍観していていいのか。言葉だけで用を済ませようというのか。呪文で世界をあやつろうとでもいうのか。確かに柔和であることは、時宜を得ていれば美しいだろう。しかし時宜に反する柔和は、醜悪でしかない。それは単なる臆病風に吹かれているにすぎない。いざという時には、男子は断じて立たねばならない。今こそ、その時だ。ヒュペーリオンはかくして一躍奮起する。

だが、美の女神ディオティーマは恋人の従軍に反対だった。武力の行使、軽挙妄動、野蛮な戦闘、それらはいずれもヒュペーリオンの高貴な人柄に相応しくないと思う。不似合いな行動の結果、その気高い魂が荒廃し、溌剌とした精神が疲憊してしまうのではないか。その揚げ句、絶望して、ああ、我が青春の理想よ、お前はどこに行ってしまったのか、と慨嘆し、果てはこの人生を呪詛するはめになりはしないだろうか。愛する心によぎる不吉な予感から、ディオティーマは参戦を思いとどまらせようと試みるが、血気にはやる若者の気持ちを翻すことはできない。結局自分の胸の内で悲しみに耐え、運命の行方を黙って見守るしかないのだと観念する。ディオティーマの母の家に友人たちが参集し、ヒュペーリオンの壮行会が開かれる。これが若い恋人同士の永遠の別れになろうとは、本人達すら夢想だにしなかった。

ヒュペーリオンが恋人の住む島を離れ、ペロポンネソス半島のアラバンダの許を訪ねた夜、やがて始まる戦いを前にして、若者同士互いに鼓舞し合うように、意気軒高たる胸中を吐露する。

独立独歩の生活、名誉ある新たな生活、それこそ望むところだ。我々は鬼火のように沼地から生まれ出たのか、それともサラミス海戦の勝利者の末裔なのか。一体どうなんだ、今は。どうしてお前は下女にまで成り下がってしまったのか、ギリシアの自由なる天性よ。どうしてお前はそんなに堕落してしまったのか、祖国の民よ。ジュピターやアポロの神像も、かつてはこの民族の似姿にほかならなかったのに。だが、僕の言葉も聞いてくれ、イオニア

の空よ、祖国の大地よ。お前は乞食女のように半裸で、古代の栄光の襤褸布をまとっているではないか。僕はそれがもはや我慢ならないのだ。

二人の若者は互いの熱血を奮いたたせては戦争を肯定し、若い独立国の夜明けの到来を盲信しつつ青春を賛美する。すべては各人のため、各人は万人のため、というモットーのもとに、青春は勇んで結集し、散華の道を突っ走る。だが、人はやがて気づく、青春が過ぎ去って初めて、青春を愛するようになることを。

いよいよ戦いの火ぶたは切られた。ヒュペーリオンとアラバンダはギリシアの義勇軍の一員となり、敵陣の占領するペロポンネソス半島の南へと進軍する。三度の小さな会戦に勝利したまではよかったが、途中敵を包囲しての攻防戦に手間取っている間に、味方の陣営内に不穏な空気が漂い始める。果たしてディオティーマの不安と危惧が的中する事態が出来したのである。

もうおしまいだ、ディオティーマよ。僕の部下は見境なく略奪し、殺戮した。同胞までもが打ち殺された。ミシストラのギリシア人たちには何の罪もないのに。殺されなかった人々も途方に暮れてさ迷っている。彼らの死んだような表情は、天地に向かって、野蛮人たちに復讐してくれるように叫んでいる。その野蛮人の先頭にいたのが僕だったのだ……だが、僕も賢明になった、僕の部下たちの正体を知ったのだから。実際の話、盗賊団で我が楽園を建設しようなんて、狂気の沙汰だった。いやはや、聖なる復讐神に見舞われたのも、僕には当然の報いだ。僕は耐えよう。苦痛が僕の最後の意識を粉砕するまで、耐え忍ぼう……今後事態はどうなるのか、分からない。運命は僕を模糊たる深遠に突き落とした。それも言わば自業自得だ。恥辱の故に、あなたの前から僕は自分を追放する。それがどれだけ長く続くことになるのか、分からない。

部下たちの残虐行為を制止しようとして負傷したヒュペーリオンは、アラバンダに助けられ、その親身な看護でどうにか快方にむかう。しかし恥辱と失望によって受けた彼の心の傷は容易に癒えず、自ら無価値の存在と断罪する。おまけに事の経緯を知った実の父親からも絶縁される。絶望の中で、最後の救済を戦闘に賭ける決意をして、ディオティーマに決別の手紙を書く。それからロシア艦隊に乗り込み、決死の覚悟で海戦に参加する。肉弾相撃つ激戦の中で深手を負って倒れたヒュペーリオンは意識を失う。瀕死の最中、奇跡的に救出されて病院に運ばれ、病床で死生の境をさ迷う。今回もアラバンダが危機をくぐり抜けて駆けつけ、友の病床に付き添い、その安否を気遣う。小事に拘らず、思慮深く、勇敢で、豪気な男の中の男ともいうべきアラバンダ。その親友が片時もそばを離れず、こまやかな心遣いで介護してくれる。その友情にヒュペーリオンは感激する。傷の回復とともに、静かな生命力と安らかな青春の喜びが再び蘇る。戦闘の中で恥辱と絶望と死の恐怖を閲したヒュペーリオンは、やっと素直に自然や周囲の全てに感謝の気持ちを抱き、その感謝の念を率直に表現できるようになっ

た。

芸術家がするように、僕は自分を純粋に保とう。無邪気な生活よ、森と泉の生命よ、僕はお前を愛そう。お前を敬おう、おお、日光よ。お前に触れて心を静めよう、美しい霊気よ。お前は空の星に生命を吹き込み、地上ではこれらの樹木の周りにそよぎ、この胸の中の琴線に触れてくれる。おお、人間たちの気まぐれよ。乞食のように、僕はこれまで項を垂れていた。自然の神々はあらゆる贈り物を手にして、僕を見守っていたのだ。

漸く傷が癒えて、新しい生活への希望が兆し始めたヒュペーリオンは、アラバンダに励まされ、自分が生存していること、そして彼女と再会して新たな生活を始めたい旨を伝える決心をして、ディオティーマに手紙を書こうとした所へ、彼女からの書面が届く。

あなたのように、魂全体を一度傷つけられてしまった方は、もう切れ切れの喜びに安住することはできません。あなたのように、虚無を感じ取った方は、最高の霊気を受けて晴れやかになるほかはないのです……今の時代は、死んだような人達が大地の上を歩んでいるだけで、本当に生きている人達、神々しい人達は、地の下にいるのだという悲しみに襲われました。そしてその悲しみは、あまりにもまざまざと、文字通りあなたのお顔に書かれているのを、私は見ました。それで、私はあなたのお感じが正しいのだと、心の底から思うようになりました。それと同時に、あなたという方が、私には一層偉大に見えてきたのです。秘められた力を一杯お持ちの方、これから現れてくる価値を深いところに貯えている方、希望を託しうるただ一人の青年、そういう人に見えてきたのでした。運命がこれほど声高に語りかける人は、運命ともっと声高に語ってもよいのだと、私は自分に言い聞かせました。測り知れない苦しみに、その人が悩んでいればいるほど、それだけ測り知れない力強さの持ち主で、その人はあるのです。ただあなた一人に、私は世界の立ち直りを期待しました……私達は別れましょう。あなたのおっしゃることは本当です。私は子供もほしくありません。こんな奴隷の世界に子供達を任せたくありませんもの。可哀想に草木たちまで、この日照りのために、私の目の前で枯れしぼんでしまいました。ご機嫌よう、愛する雄々しいお方。さあ、いらっしゃって下さい、あなたの魂をささげる値打ちのあるところへ。この世界にも、きっと一つぐらいは、あなたの思いを晴らすことのできる戦場か、生け贄の場があることでしょう。何という痛ましいことでしょう、こうして有為の人達がみんな、影のように消えて行ってしまうのは。けれども、どんな最後をお遂げになるにしても、あなたは神々のもとへお帰りになるのです。貴い、自由な、若々しい自然の生命の懐へ、あなたを生んだ故郷へお帰りになるのです。それだけがあなたのお望みであり、私の望みでもあるのです。

この書面を読んだヒュペーリオンは、早速返事をしたためる。決別状を書いた経緯、ロシア艦船に乗り込んで憤死する覚悟だったこと、それはしかし軽薄で不遜な振る舞いだったこと、その償いをするためにも彼女ともう一度新たにやり直したい旨を綿々と訴える。ロシア軍

からの除隊許可の通知が届いたのを機に、ディオティーマの住むカラウレア島に帰ろうと思い立つ。ところが無二の親友アラバンダが突如別れを告げて旅立つ。ヒュペーリオンから間接的に聞かされて、まだ見たこともない美の女神ディオティーマにひそかに恋い焦がれるようになった彼は、未来に起こりうる三角関係の悲劇を予期して、大事な友情を壊さないために、自ら身を引く。そしてかつての秘密結社の仲間を裏切った制裁を受けるべく、古巣に戻る決意をした。言わば友の幸福のために、自らを犠牲に供する道を敢えて選んだのだ。同性との友情を異性との恋愛に優先する、ここにヘルダリーンのロマン主義精神が顕著に発露している。さてアラバンダを港で見送った後で、今度はディオティーマから再び書簡が届く。その長い手紙は何と、愛する乙女の白鳥の歌であった。

私は今思っていることを、率直に申し上げましょう。あなたの火は私の内部に生きております。あなたの精神は私に乗り移りました。そのことは私にとって、何の障りにもなりませんでした。ただあなたの運命が、私の新しい生命に致命的な痛手を負わせました。私の魂はあなたにお会いして、あまりにも力強くなってしまいました。それはただあなたによってだけ、元通りに静められたでしょうに。あなたは私の生命を大地から引き離してしまいました。あなただけがその私をまた大地に縛り付ける力をお持ちだったのです……自然の結合の中では、誠実は決して夢ではありません。私達が別れるのはただ、一層親密に結び合うため、神々しく平和に一切と、そして私達自身と結び合うためです。私達は生きるために、死んでゆくのです。

この書簡に引き続いて、友人のノターラからディオティーマの死を知らせてきた。その臨終の美しかったこと、火葬にして灰は骨壷に納め、森の中の彼女が初めてヒュペーリオンに会った場所に置いてほしいという遺言を残したことなどを伝え、さらに彼女の母親の悲嘆や彼自身の身の安全のためにも、カラウレア島には来ないようにとしたためてあった。ヒュペーリオンは友人の忠告に従い、恋人の眠る島を訪れるのを諦め、イタリアのシチリア島に赴いた。そこからノターラ宛に、自らの苦悩を打ち明ける。

ああ、ノターラ、僕はもうおしまいだ。僕の魂が僕自身をめちゃめちゃにしてしまったのだ。ディオティーマが死んだのも、この魂のせいなのだと自責の念に駆られている。自分であれほど自負していた青春の思想さえ、僕にはもはや何の価値もない。その思想こそ僕のディオティーマに毒を盛った元凶なのだ。

こうした悲嘆からの逃避の場所を求めて、ヒュペーリオンはイタリアからドイツに渡る。あたかも故郷を失った盲目のオイディプスになったような気持ちで、異国の美しい自然と同じく美しい魂の人々に出会えることを期待した。ところが、そのドイツはヒュペーリオンの期待を裏切ったばかりか、彼を侮辱し、傷つけた。その憤激から発する酷

評は誠に痛烈だ。

昔から野蛮人だ。勤勉と学問によって、さらに宗教によってさえ、彼らはますます野蛮になった。あらゆる神々しい感情を持つのに無能で、聖なる優美の女神の幸福を感ずるには、骨の髄まで腐っている。その誇張ぶりと貧弱さの度合いは様々で、高貴な魂の人々を侮辱し、鈍感で、その調和のなさときたら、投げ捨てられた容器の破片のごとしだ……ドイツ人ほど支離滅裂な国民は考えられない。手職人はいる、だが人間がいない。思想家はいる、だが人間がいない。僧侶はいる、だが人間がいない。主人と下僕、若者や分別のある連中はいる、だが人間がいない。これではまるで、手や腕や四肢がばらばらに切断されて散乱し、その流れた生き血が砂中に染み込んでいる戦場と同じではないか。

ドイツ人への悪口雑言はさらに綿々と続くが、これは詩人ヘルダリーンの祖国に対する呪詛であろうか。彼を少年時代から鞭打ち、駆り立て、精神的に圧迫してきた祖国の人々への怒りが、ここで爆発したのであろうか。多少詩人の為人を知る筆者には、この痛罵は唐突で、意外な感じがする。人間的資質としては生来、柔和で、善良で、優雅で、人を憎むことを知らぬヘルダリーンが、よりによって、この小説の終わり近くになって、これほど辛辣なドイツ批判を展開するにいたったのは何故であろうか。そこには、この小説執筆当時の詩人をめぐる辛い状況がある。

最初の住み込み家庭教師の務めに失敗したヘルダリーンは、純粋な詩作と創作の生活をしたいと願うが、それは当時の社会情勢では、所詮不可能な事だった。生活の糧を得るためには、再び家庭教師の口を求めるしかなかった。ちなみに当時の家庭教師 Hofmeister とは、今日の日本のそれとは違って、有為の青年や学者の卵が立派な定職を得るまでにする、いわば見習い修業のようなもので、決して社会的に低い職業ではなかった。あのヘーゲルでさえ大学に私講師の地位が見つかるまで、数年間、家庭教師の職を続けたのである。かくしてヘルダリーンも一七九六年の一月初旬、友人の仲介で、フランクフルトの富豪ゴンタルト家の嫡男の教育係に就任した。そこで銀行家の若夫人にして教え子の母親ズゼッテに出会う。これこそ天佑ともいうべき運命的な邂逅だった。相似た優雅と繊細の二つの魂は即座に互いを認識した。最初は互いに尊敬する友情であったが、信頼が深まるとともに、それが清らかな愛情へと昇華していった。そして二年八カ月、突如、当主の嫉妬と憤怒の火山が噴火した。その背景には、密かにヘルダリーンに横恋慕していた当家の小間使いの邪推による告げ口があったとされる。だが真相は不明で、その後の経緯も分からない。ただ不倫の意識など毛頭なく、夫人との純粋な精神的愛情を信じていたヘルダリーンは、夫の暴言に深く傷つけられて、即刻職を辞し、雇主の邸宅を出た。ここから詩人の運命が急転し始める。地獄と天国がめまぐるしく渦巻く緊張の日々。その間の事情を垣間見せる資料がある。それは詩人に宛てたズゼッテの書簡、いわゆるディオティーマの手紙である。

これは詩人の遺族に永く秘蔵されていたが、夫人の死後百十数年をへた今世紀になって初めて公刊された。この書簡は誠に貴重なもので、この書き手の女性の魂の気高さとその至誠、限りなく深く純粋な愛情が切々と伝わってくる。筆者は女性の愛の深さをこれほど如実に開示したものを知らない。わずかに、ラファイエット夫人の『クレーブの奥方』とバルザックの『谷間の百合』に挿入された書簡を想起するが、あれらには多少とも作家の創作が混入している。ところが『ディオティーマの手紙』はズゼッテという実在の人物の真の直筆であって、そこには他人による歪曲や修正は一切ない。このような素晴らしい手紙を書ける女性が実在したこと、それが詩人との出会いと別離によってその美しい魂を開花させたことに驚き、深い感動を覚える。その驚嘆と感動の一端を伝えるためにも、ここでその手紙の一部を紹介したいのだが、余りに分量が多いため、紙幅の制約上、第一信の冒頭部分だけを採録する。これは日付がないが、一七九八年九月末から十月初旬に書かれたものと推定される。

私はお手紙をさしあげずにはいられません、愛するお方。あなたに向かって沈黙を守っていることには、私の心はもう耐えられないのでございます。もう一度だけ私の気持ちをあなたに申し述べさせてくださいませ。そうした後では、あなたさえそのほうがいいとお思いでしたら、私は喜んで、喜んで沈黙いたしましょう。あなたがお発ちになってからと言うもの、私の周りも私の心の中も、なにもかも、どんなにかもの寂しくて空虚になっていることでございましょう。まるで、私の生活がすっかり意味を無くしてしまったようでございます。苦痛の中でしか生活を感じないのでございます。

今はこの苦痛がどんなに好もしいものでございましょう。これが無くなるといたしますと、これが胸の中で鈍くなるといたしますと、どんなにか私は、またそれを憧れ求めることでございましょう。もう、私達の運命を歎く涙だけしか私を喜ばせてくれるものはないのでございます。本当にこの涙はたくさんあふれ出ます。晩の九時頃にはもう、一日を短くしようとして、子供達と一緒にやすむのでございますが、その時に、あたりが静かになりまして、誰にも見られなくなりますと、涙があふれ出るのでございます。そういう時に、度々思いました、一体こんなに大切な純粋な愛が、いつか煙のように消え失せてしまって、どこにも名残をとどめておかないようになってしまうのかしら、と。すると、時さえも消すことができず、変えることができないままに残しておいてくれるようなものを、せめてあなたにお書きする言葉によって、この愛のために築きたいという願いが胸の中に湧くのでございました。独りで静かにしていられさえしましたら、熱烈な色彩でこの愛を、この心からの気高い愛を、ごくほのかな明暗のすみずみまで描き出し、極め尽くしたいと、どんなにか望んでいることでございましょう。こんなに始終邪魔をされ、心を乱されておりましては、きれぎれにしか愛を感じられません。始終それを探し求めております。それでいながら、それは完全に私の中にあるのでございます。

広々としてさえぎるものの無い野におりますれば、まだしも一番気持ちがいいのでございます。ですから、始終戸外に憧れております。そこなら、壁

のようになって、あなたという悪い方を優しく引き留めて、私からもっと遠くへお逃げにならないようにしている懐かしいフェルトベルク山が見えるのでございますもの。けれども、また家へ帰ってまいりますと、もういつものようではございません。いつもならば、またあなたのおそば近くへまいるので、随分うれしゅうございましたのに、今では大きな箱の中へ閉じ込められに入って行くような気がいたします。いつもならば、子供達があなたのところから私の方へ下りて来ますと、子供達の顔のほのかな赤味やきまじめな様子や眼の中の涙などが、あなたのご影響を語っておりまして、私の沈みがちな気分をどんなにか励ましてくれたものでございましょう。今ではもう、子供達は私にとってそうした意味は持たないのでございます。それで、私は子供達に対する自分の感情を度々責めなくてならないのでございます……

これでも第一書簡のおよそ三分の一の分量である。そうした書簡が都合十七通。奇しき数字だが、この貴婦人の魂の試練を暗示しているかのように思える。いずれにせよ、この高雅な女性が詩人ヘルダリーンに及ぼした影響は計り知れないものがあり、『ヒュペーリオン』はいわば、二人の共同合作とも見なされるのである。ズゼッテ無くして、ディオティーマは無く、ディオティーマ無くして、ヒュペーリオンの第二部は生まれなかったであろう。その意味でスゼッテはこの小説の生みの母である。そしてこの小説とディオティーマの手紙は二つながら、ドイツ文学の至宝として継承され、読み続けられるだろう。

小説の中のディオティーマと同じような運命をたどったズゼッテは、一八〇二年六月二十二日、フランクフルトで病死した。享年三十二歳。死因は労咳らしいが、彼女自身が予期していたように、ヘルダリーンとの別離からくる魂の病に遠因するのではなかろうか。当のヘルダリーンはフランスのボルドーから狂気の風体で郷里に帰りついたばかりで、彼女の死を知るよしもなかった。友人がフランクルトからズゼッテの死を伝える書面をボルドーに出したが、帰郷と行き違いになり、本人の手に届かなかった。精神錯乱の兆候を見せ始めたヘルダリーンに、周囲はその後もズゼッテの死を告げなかった。告げても彼にはもう理解できなかったであろう。魂そのものに帰還した詩人に、死はもはや超克されていたのではないか。詩人の影の双生児ヒュペーリオンが、次のような美しい信念表明で小説の掉尾を飾っているのは象徴的である。

おお、魂よ、魂よ。世界の美よ。破壊しえざるものよ。永遠の青春もて魅惑するものよ。お前は存在する。死はそも何者ぞ。人間のあらゆる悲痛とはそもなんぞ。ああ、あまたの空虚な言葉は変人たちが捏造したのだ。だが一切は愉悦から生じ、そして平和の中に終わるのだ。世界の不協和音は恋人たちの諍いのようなものだ。和解はその争いのただ中にある。そして別離したものはすべて再びめぐり会うのだ。（以下第四章は次回に続く）